

## ミュケナイ文明の崩壊

— その破壊者と時期についての一試論 —

新 村 祐 一 郎

—

エーゲ文明の最終段階であるミュケナイ文明の滅亡は、ドリス人の侵入によって惹き起こされたものである、とは、しばしば、説かれるところである。しかし、ドリス人が、直接的にミュケナイ文明を崩壊させたのか否か、多少、問題があり、ドリス人がギリシア（おもにペロポネソス）に侵入したときには、すでに、何者かによって、ミュケナイ文明は破壊されていた、という意見も出ている。筆者も、最近、この両事件（ミュケナイ文明の崩壊とドリス人の侵入）の直接的な結びつきに、やや、疑問を持つに至った。その両事件がいかなる関係にあるのかを解明するためには、当然のことながら、それに関連する多くの問題を解決しなければならない。だが、筆者はこの小論で、その諸問題を論じようというのではない—否、むしろ、現在、それを行なうだけの十分な研究すら重ねていない。したがって、以下は、ミュケナイ文明の崩壊する前後の時期に対する筆者の、いちおうの、見通しに過ぎないのである。

—

ギリシアでは、紀元前一六〇〇年頃〔以下、年代は、すべて、紀元前（B.C.）であるが「前」または“B.C.”の標記を略す〕から、ミュケナイの勢力が急速に強まる。考古学的に言えば、一六〇〇乃至一五五〇年頃から、後期青銅器時代にはいるが、それ以後が、いわゆる「ミュケ

ミュケナイ文明の崩壊

ナイ時代」で、ミュケナイが文化の中心となって繁栄した。ミュケナイはアルゴリス地方の中心に位置したが、今から一〇〇年余り前から、考古学的な発掘がはじめられ、ミュケナイのほか、ティリュンス、オルコメノス、テバイ、アテナイ、ピュロスでも発掘が進められた。それにしたがって、この時代の姿は、次第に、明らかになってきている。王城の地には、必ず、宮殿と堅固な城塞があつて、その近くに、王や王族の墓として、大きな *tholos* がある。こんにちの考古学では、*tholos* が発見されたら、その付近に王城の地があつた、と考へて間違いない、とされている。このミュケナイを中心とするアカイア人は一四五〇年までにクレタのクノッソスを侵略し、そこを支配するようになっていたが、その後、ミュケナイ文明はエーゲ海全域に拡大し、キュクラデスやトロイアのほか、小アジアのミレトス、その西のロドス島、東方のキュプロス島からウガリトに及び、西方ではシチリアにまで及んでいる。このミュケナイの全盛時代に、エーゲ世界に最も近いところにあつた強国はエジプトとヒッタイトであつた。ところで、そのエジプトは一三世紀の後半になると、「北方の諸民族」(*northerners coming from all lands*)<sup>(2)</sup> に援助されたリビュアの反抗に悩まされ、同じ頃、ヒッタイトはその勢力が急速に衰えて、<sup>(3)</sup> 周辺地方の独立運動が盛となるが、これまた、外来民族の援助があつた。

このエジプト、ヒッタイトの出来事と時期的に近接している関係上、思い出されるのが、いわゆるトロイア戦争の伝説である。Schliemann が *Hissarlik* を発掘し、多大の成果をあげてから約一〇〇年を経過したこんにち、ここが古代のトロイアの遺跡であることは、ほとんど、疑われないが、トロイア戦争を史実だとすれば、それは一三〇〇年頃、地震と推定される災害で崩壊した第六市の上に建てられて、のちに戦争による火災で滅亡した第七市 a (*Troy VIIa*) だと断定したのは Blegen である。<sup>(4)</sup> この戦火のあとが、いわゆるトロイア戦争の結果であると推測されるわけだが、それを攻撃したのがアカイア人であつたか否かは発掘の成果をもつても明らかでない。明らかなのは、第七市 a の滅亡した時期が一三世紀の後半であり、それがギリシア本土では *Late Hellenic IIIb* 期 (略一三〇〇—一二二〇〇年) に当るといふことである。<sup>(5)</sup> その *L. H. IIIb* 期のギリシア本土は、大に発展した時代でもあつたが、同時に、衰退期、危険のさし迫つた時代でもあつた。イストモスに大きな防壁がつくられ、ミュケナイ、ティリュンス、アテナイなど、すでに、堅固な城壁に囲まれている地方でも、更に、その城壁を補強し、他方、敵に攻囲された場合の水路を確保すべき方策が講じられている。これは、明らかに、北方からの危険—異民族の侵入が予想されたために取られた手段である。<sup>(6)</sup> *L. H. IIIb* 期、特に、その後半には、このような危機感がギリシアにみなぎっている時期であつた。しかしながら *L. H. IIIb* の末期に

は、すでに、城壁に囲まれた王宮のある都市のうち、発掘によって、現在、確認されるものだけでも、相当数の都市が戦争の結果と思われる火災で焼け落ちており、様々な防護策も侵入する民族の力に抗し得なかったことを示している。このような危急存亡の秋に、はたして、アカイア人が、大挙して、トロイアにまで遠征に赴くであろうか。そのため、こんにちでは、トロイア攻略が一〇年間という長年月を費して、アカイア人によって行なわれた、という点に疑問を持つ人も少なくない。この戦争の規模については、すでに、ツキュディデス(一・二)も、あまり大きくないことを示唆しているが、当時のギリシアの置かれている状況から推して、実際に、アカイア人がトロイアを攻撃したとしても、小規模で短期間のものだった、と考えるのが妥当であろう。

これに関連して考察しなければならないのは、すでに、二〇〇〇年頃からはじまった東ヨーロッパから西アジアにかけての大規模な民族移動である。大きく見ると、東はメソポタミア、西はイタリア、シチリア、北は黒海に至る範囲内での移動であり、その根源の地は Finley のいわゆる Carpatho-Danubian region すなわち、こんにちのハンガリア付近である、とされている<sup>(6)</sup>。この民族移動のはっきりした影響がギリシアと関連する地にあられたのが、先に触れた一三世紀後半のエジプトにおいてであった。エジプト側の記録によると、Mernephtah (1236—1223) の治世五年目(一二三二年)に、リビュア人の反抗があったが、そのとき、リビュア側には、海を越えてやってきた多くの同盟軍の支援があった、という。その同盟軍を構成した民族は Ekwesh, Teresh, Lukka, Sherden, Sheklesh であるが、そのうち最初の Ekwesh は Achaioi (アカイア人)を指すと考えられている<sup>(9)</sup>。これらの民族をエジプト人は「北方の諸民族」と呼んだが、その中にアカイア人が含まれていたとすれば、バルカン半島北部乃至イリュリア地方からエジプトへ向うには、ギリシアを通過してクレタ島を経由するのが、最もあり得るルートである。イリュリア方面からの民族移動の一派がギリシアにもかなりの影響を与えつつ、クレタ島に至り、他の民族と合同して、リビュアに向ったと見ることが出来る。ついで、Ramesses III (1198—1166) の時代にも、エジプトは海陸から異民族の攻撃をうけているが、その時の民族名は Peleset, Tjekker, Sheklesh, Denyen, Weshesh となっており、Denyen は Danaoi を指すものではないかとの推定がなされている<sup>(10)</sup>。したがって、このたびもアカイア人または少なくともエーゲ海を経由して来た民族が含まれていたことになる。彼らはヒッタイトの海岸部、キュプロスを経て、シリアで他の民族と合流し、アララク、ウガリトなど多くの都市を破壊しつつ南進し、一一九一年に、エジプトへ北東方から侵入したが、これも、前回同様、撃退されている。また、その諸民族の中の Peleset は Peleshim (ペリシテ人)で、エジプトで撃退されたのち、パレスティナ

に定住したが、その遺跡からは L. H. IIIc (略二二〇〇—二二〇〇年) に属する陶器が出るので、彼らも、少くとも、エーゲ海域を通過した、と考えてよい。一方、ヒッタイトは文献には何も残していないが、二二〇〇—二一九〇年の間に崩壊した可能性が強い。<sup>12)</sup>

このように、略二二〇〇年前後には、小アジアからキュプロス、シリア、エジプトにかけて、西方からの民族移動の波に見舞われている。この事実を考えると、トロイア第七市 a の戦火による破壊も、この移民の侵入乃至は通過に伴う動乱によるものではなかったであろうか。小アジアの大国ヒッタイトが二二〇〇年頃、異民族の侵入によって滅亡した、ということは、少なくとも、バルカン半島北部またはイリュリア地方の民族の一部が小アジアに侵入したことを意味しているから、同じ小アジアの西部に位置するトロイアも攻撃された可能性は強い。また、移動民族が、もし、イリュリア地方から小アジアに行くとするれば、必然的に、ギリシアを経由しなければならぬ。したがって、ギリシアを経由した民族による小アジア方面侵入がギリシア人(アカイア人)のトロイア攻略という伝説を生み出す基礎になったという可能性も考えられよう。その移動民族がギリシアを通過するうちに、アカイア人の一部が共に移動することもあり得るし、そうなれば、伝説の生み出される可能性は更に高まる。いずれにせよ、トロイアだけが当時の民族移動の余波をうけなかったとは考えられない。

### 三

L. H. IIIb 期にギリシア本土に侵入し、ミュケナイその他の都市を攻略し、ミュケナイ文明を崩壊させたのは何者であろうか。それは、しばしば、ドリス人である、とされているが、古代ギリシアの伝承では、ドリス人のペロポネソス侵入は「ヘラクレイダイの帰還」と表現されている。ヘラクレイダイとはヘラクレスの後裔を意味するが、ヘラクレスがギリシア神話中の最大の英雄であるために、スパルタの王家をはじめ、ギリシアの名家の多くがヘラクレスに連なる系譜を持ち、ヘレニズム時代の王家さえも、ヘラクレスを祖先とすることを望んでいた。したがって、これらすべての人々が「ヘラクレイダイ」と自称していたが、伝承の中で、ヘラクレイダイというのは、ヘラクレスと二番目の妻デアイアネイラとの間に生まれた五人の子供達とその子孫、特に五人の中の長兄ヒュロスの系統を指している。

ヘラクレスはミュケナイ時代の英雄と考えられている人物であり、伝説上、ゼウスがペルセウスの孫アムフィトリオンの妻アルクメネに近づいた結果、生まれた子であって、ゼウスはこのヘラクレスを、将来、ミュケナイ王とするつもりであった。しかし、それが神々の間での反目

のために実現されず、ミュケナイの支配権はペルセウスの別系の孫エウリュステウスの手に移り、ヘラクレスは彼に仕える身となった。ヘラクレスが死んだとき、彼の子供達はエウリュステウスに追われてペロポネソスを去ったが、そのうち、父祖の地ペロポネソスに帰ることを念願するようになった。「ヘラクレイダイの帰還」の物語とは、彼らが何回も失敗を重ねたのち、ようやく成功してペロポネソスに帰り、そこを支配するようになった経緯を語るものである。

この「ヘラクレイダイの帰還」について、ヘロドトス (IX. 26) はヘラクレスの子ヒュロスがイストモスからペロポネソスへ帰ろうと布陣したが、ペロポネソス側と話し合って、軍隊を動かさず、ヒュロスとペロポネソス軍中の優れた勇士とが一騎打をし、ヒュロスが勝てばヘラクレイダイは帰還し、もし彼が負けた場合には、以後一〇〇年間はペロポネソスへの帰還を求めないことを約束した上で、アルカディアのテゲア王エケモスと一騎打をして敗れ、死亡したことを語っている。これによって、ヘラクレイダイの帰還は一〇〇年先に延ばされたことになるのだが、この話は、ドリス人がイストモス方面からペロポネソスへ侵入しようとして、容易に果し得なかったことの伝説的表現であるとの見方もある。

一方、ツキュディデス (I. 12) は、トロイア戦争直後のギリシアはかなり混乱状態だった、と述べており、その原因をトロイアへ遠征した人々の帰国が遅れたことに求めているが、とにかく、内乱がおこり、安住の地をほかに求めなければならぬ種族もあったことを述べている。この時の種族の移動について、彼は、ポイオティア人がテッサリア人によって故地を追われて、カドメイア地方に至り、ここをポイオティアと改名して定住した、という。そして、これはイリオン陥落後六〇年目の出来事だが、更に、陥落後八〇年目にドリス人がヘラクレイダイと共にペロポネソスを占領した、とツキュディデスは述べているのである。

このヘロドトスとツキュディデスをもとに、Hammond はトロイア陥落を略一二〇〇年と仮定すれば、ドリス人の失敗に終った第一回のペロポネソス侵略が一二二〇年頃、テッサリア人とポイオティア人の移住が一一四〇年頃、ドリス人のペロポネソス占領が一二二〇年頃、というクロノロジーを掲げている。<sup>13</sup> この Hammond のクロノロジーが正しければ、北方からの脅威を感じて、イストモスに防壁を築いたのは、まさに、このドリス人の侵入に備えたものであり、アカイア人は彼らの侵入を、いったん食い止めてから、トロイアを攻撃したことになる。

ここで注目すべきことは、ツキュディデスがトロイアの陥落からヘラクレイダイの帰還までを八〇年と述べている点である。また、伝説に基

づくと、トロイアへ遠征したアカイア方の総大将アガムノンから数えて三代目(孫)のティサメノスの時代にヘラクレイダイが帰還したことになってゐる。つまり、いづれにせよ、トロイア陥落とヘラクレイダイの帰還との間には、かなりの年数があり、この両事件がすぐ引き続いて生じたのではないことを暗示している。

また、考古学的研究によれば、トロイア第七市aの滅亡は、多少の幅を含めても、二二五〇—二二〇〇年の間であり、ギリシア本土ではL.H.IIIbの後半に当り、イストモスに防壁が築かれ、諸都市の防備が一段と強化された頃である。しかも、L.H.IIIb末期には、大部分の都市がすでに破壊され、ミュケナイ文明は崩壊に瀕していた。すなわち、トロイア第七市aとミュケナイを中心とするペロポネソスの文化圏は、ほぼ同時に滅亡しているのである。しかるに、ツキユディデスその他によると、トロイアの滅亡とヘラクレイダイの帰還(ドリス人の侵入)との間に八〇年が経過しているというのであるから、ドリス人の侵入は、L.H.IIIcに入ってからのものである。とすれば、ドリス人がミュケナイ文明の破壊者だ、ということとはあり得ず、したがって、この文明の破壊者は他に求めなければならない。その際、思い出されるのは、ヒッタイト、シリア、エジプトなどに重大な影響を及ぼした移動民族(いわゆる「海の民」)である。彼らの中の *Ekwesh* と *Denyen* がアカイア人と見られる点から考えても、少くとも、民族移動の波の一部はギリシアを通過し、それに伴って、一部のアカイア人が行動を起したものと推察することも不可能ではない。その場合、ギリシアを通過した可能性の高いのは、ペリシテ人とイリュリア人である。ペリシテ人は地中海東岸に定住後、L.H.IIIcの陶器を持っているので、ギリシアを通過したのは、一二〇〇年よりのちであろう。それに対して、イリュリア人は二〇〇〇年紀の後半に、イストロス川(ドナウ川)の北岸から移動して来た民族に押されて、南方に移動を開始した。その一部はアドリア海を渡って南イタリアへ移ったが、他の一部はバルカン半島にはいった。更に、ほかの一部は、海上をエペイロス、ペロポネソス沿岸に沿って南下し、クレタを経て、エジプトあるいは小アジア南岸地方を襲った移動民族の一部を形成した可能性も濃厚である。ペリシテ人の中にも、イリュリア系民族の要素を認めようとする見解さえある。<sup>14)</sup> このイリュリア人の移動がギリシアに大きな影響を与えずにはおかなかった筈である。Schachermeyr と Tomlinson は共に、注意深くイリュリア人の名は使っていないが、北西方(すなわち、イリュリア地方)からの移動民族がギリシアに侵入した、という見解をとっている。

Schachermeyr は移動諸民族がエジプトに侵入する以前に、ギリシア本土に侵入している、と見る。彼はイストモスの防壁がまだ完成され

ないうちに、異民族が侵入して、ミュケナイとティリュンスが征服され、一方、ピュロスが海からやってきた民族に攻撃されて破壊されたが、その海からの攻撃の中には Sherden, Sheklesh が含まれていた、と推定する。そして、これらの侵入民族がギリシアで「ミュケナイ人の騎士と船舶」(myken. Ritter und Schiffe) とを備い入れたに違いない、と主張する。Schachermeyr は「おそろしく、このミュケナイの人々を Achaioi に同定される Ekwesh と見て、トロイア戦争もこの傭兵によるトロイア第七市 a の攻撃と考えているのであろう。その上、彼は一二〇年頃以来、彼ら移動民族、いわゆる「海の民」がエーゲ海圏の支配者であったが、ドリス人の侵入によって、その支配は瓦解した、と述べている。<sup>(45)</sup> この Schachermeyr には、かなり大胆なところも見られるが、ミュケナイ文明を破壊したのは L. H. III に侵入した移動民族（彼の言によれば、海陸両路による Seevölker）であり、ドリス人の侵入はそれよりも、更にのちであった、という見解をとっていることは明らかである。

また、Tomlinson によると、移動民族のペロポネソス侵入は三回に分かれる、という。第一波は一三世紀の末にイストモスを通じたもので、次の世紀の初頭にかけて、ペロポネソスの青銅器文明を破壊し、第二波は一二世紀で、前回の侵入で残された集落が破壊され、かくして、人口、文化共に乏しくなったところに第三波が侵入した、という。そして、彼はこの第三波こそがドリス人であって、前二回の侵入には、ドリス人は含まれていなかったことを強調する。<sup>(46)</sup> 彼は第三波以外の移動民族が何者であったか確言を避けているが、エペイロス地方の北にあたるイリュリア地方からの侵入民であることは間違いない。したがって、イリュリア系の民族を中心としたものと思われる。しかし、Tomlinson の如く、ドリス人と他の移動民族とをはっきり区別する点には、問題がある。移動民族は移動の途中に、雑多な要素を加える可能性がある。

#### 四

そもそも、ドリス人とは、ミュケナイ文明を形成し、発展させた民族と同じギリシア民族の一派ではあるが、永らく、バルカン半島南部に進入せず、ギリシア西北部で牧畜生活を営んでいたもので、言語的にも、異なった方言群を形成していた。<sup>(47)</sup> しかし、ドリス人と呼ばれるもの自体が、かなり、複雑な存在なのである。ドリス人は、常に、Hylleis, Dymanes, Pamphyloioi の三部族に分かれている。伝説では、このうち Hylleis はヘラクレスの子ヒュロス (Hyllos) の系統で、あとの二部族はドリス人の名祖ドロスの孫に当るデュマスとパムフュロスの系統で、純粋なドリス人とされているが、最近の研究によると、Hylleis はイリュリア系、Dymanes は本来的なドリス人、Pamphyloioi はドリス系と他の要素と

の混合部族とされており、<sup>18)</sup>ひとくちにドリス人といっても、実に雑多な要素が含まれているのである。そのことはドリス人がその故地で、様々な移動民族の影響をうけていることを示している。

ところで、二〇〇〇年紀後半のイリュリア人の移動によって、イタリア人がイタリア半島に入り、トラキア人が東方へ海を渡って、小アジアへ至り、ギリシア北部に居住していたドリス人が、南へ押される結果となった。<sup>19)</sup>したがって、これら影響を与えられた民族には、イリュリア系の民族が、若干、含まれていたとしても不思議ではない。特に、ドリス人の場合、Hylleis がイリュリア系とされているが、伝説上も、ヘラクレスの子で Hylleis の名祖となったヒュロスはヘラクレスの死後、ドリス人の王アイギミオス（デュマスとパムフュロスの父）の養子として育てられ、アイギミオスはデュマス、パムフュロス、ヒュロスの三人にその領土を分ち与えた、という。また、別伝によると、ヒュロスはファイアケス人を率いて、イリュリアに移住し、その名をイリュリアまたは、エペイロスのヒュレイス人 (Hylleis) に残した、<sup>20)</sup>という。しかし、また、ファイアケス人を率いてイリュリアに来たのは、同名の別人（同じヘラクレスの子であるが）だ、とする考え方もある。<sup>21)</sup>

これらの伝説は、いずれも、ドリス人の中でも Hylleis が、本来的なドリス人ではないことを認め、Hylleis とドリス人との関係、あるいは、Hylleis とイリュリア系との関係を説明しているのである。

以上のように、Hylleis を通じて、ドリス人とイリュリア人との関係が生ずるわけで、その故に、両者を截然と分類すべきではない、と思われるのである。また、ドリス人の場合も含めて、一般に、民族の移動、移住は、一回の行動によって行なわれるものではなく、<sup>22)</sup>何回かに分かれて行動が起こされるから、同一の民族の同方向への移動にしても、すべてが同時に移動するとはいえない。イリュリア人の移動のうち、ギリシア北部に向ったものについても同様であろう。Tomlinson はペロポネソスへの侵入を三回と考えているが、少くとも二回以上あったことは確実である。彼が第一波とする一三世紀末にイストモスを通過して、青銅器文明を破壊したというのは、先に見た T. H. IIIb 末期の多くの都市の破壊を指す。彼はその文明の破壊の内容として、数多の王宮の破壊、文字 (linear B) の消滅、宮殿貯蔵庫の消滅、海外貿易の衰微をあげている。また、Finley も L. H. IIIb 末期のミューケナイ文明の破壊として、王宮と城塞の消滅、<sup>23)</sup> tholos の消滅、文字の消滅をあげている。更に、Tomlinson は、この時の侵入者はギリシアに定住せず、文明を破壊して通過したのだ、<sup>24)</sup>といっている。Finley もこの時の catastrophe には new linguistic factor を全く伴っていない、<sup>25)</sup>とし、L. H. IIIb 末期の文明破壊者がギリシアには定住しなかったことを示している。そして、

Finley は、更に、この際の移動民族が、いわゆる「海の民」と関係がありそうだと推論している。Forest も一二〇〇年頃の侵入者によって、ミュケナイ文明の没落はあったが、破壊者はそこに止らず、さらに移動して行った、という。このように、第一回目の、おそらくはイリュリア人を主体とする侵入民は、いったん、ペロポネソスに侵入し、諸都市を破壊したが、のち、そこに定住した痕跡は全くなく、文字通り、通過者だったのである。これによって、ペロポネソスの人口は激減した。それは、先住のアカイア人が避難民となって、破壊をまぬかれた地方に去ったからであるが、反面、「海の民」などの移動民族の中にギリシア系と思われる *Ehwesh*, *Denyen* が含まれていたとすれば、これもまた、人口減少の一因といえよう。このイリュリア系民族の侵入こそ、ギリシアの住民の一部を移動民族に化するきっかけになった、と考えられる。また、L. H. IIIb 期とトロイア第七市 a とが同時期であり、しかも、両者の破壊された時期も近接しているところから、イリュリア系民族を含む移動民族による破壊活動が通過地域の民族の一部を巻きこみながら、エーゲ海の西岸から東岸へと、一二〇〇年頃、かなり急速に進んでいったことが推定される。L. H. IIIb 期後半のミュケナイ、ティリュンス、アテナイなどの防衛力の増強やイストモスの防壁の構築は、この不特定の移動民族の侵入を予想して行なわれたものだったのである。

さて、Tomlinson のいう侵入の第二波は、一二世紀の間で、前回の侵入の際、残された集落が破壊された、とする。Finley は L. H. IIIc にもミュケナイ、ティリュンス、イオルコスなどには、王宮も修復されず、文字も再現しなかったが、これらの都市に住民は存在したことを指摘する。しかし、彼はこれが破壊されるのはドリス人の侵入によっていると見なしている。Hommond は L. H. IIIb の侵入では残されたミュケナイの城塞が焼け落ちるのは L. H. IIIc 期の後半（彼のクロノロジーによれば略一一二〇年）とし、これをドリス人の侵入（略一一四〇―一一二〇年）の結果と論じている。二回目の侵入をドリス人とする点では Finley と同様である。

Tomlinson が何故一二世紀に第二波の移動民族の侵入を想定し、これによって、完全に青銅器文明が崩壊するとし、そのあとに、ドリス人の侵入を考えるのか、その根拠は明らかでない。

北方からペロポネソスへの最初の侵入民族はイリュリア系が主体であるのに対し、最後の侵入民族の主体がドリス人であった。しかしこの両者の果たした役割は全く異なっていた。前者はミュケナイ文明をほぼ崩壊させたが、ペロポネソスを通過したのみで定住しなかったのに対し、後者はほとんど、ミュケナイ文明の崩壊したあとに侵入し、そこに定住したのである。もちろん、移動民族の侵入乃至通過は二回に限られるとは

断定できず、その間に一回、あるいは更に多くの回の通過を推定することも不可能ではない。

しかし、L. H. III<sub>B</sub> 期の後半にはじまる移動民族の侵入乃至通過は回数とはかわりなく、イリュリア人と彼らの移動の通路にあたる地方に居住していたドリス人とを含んでおり、通過者となった初回と定住者となった終回との相違は、あくまで、その数的な主体であって、含まれていた要素はいずれも同様であったと思われる。Tomlinson は第三波がドリス人で第一、二波にはドリス人が含まれていなかったとするが、移動エペイロス地方に南進すれば、多少とも、ドリス人に影響を及ぼし、彼らの一部が共に移民族がイリュリア方面から動を開始することは十分に得ることである。したがって、第一回目の侵入の際にも、多少のドリス人が含まれていたと推定されるが、それと同様に、最終回の侵入にもイリュリア人とドリス人との協同が見られる、と思われる<sup>脚</sup>。

最後の侵入と思われるヘラクレイダイの帰還の際には、のちのスパルタ、アルゴス、メッセネのドリス系諸王朝がいずれもヘラクレスを祖とする系図を持っていることから推して、少なくとも侵入時には Hyllis が指導的役割を果たしたのであろう。その Hyllis が実はイリュリア系であるのだから、この最終の侵入も、イリュリア系民族の移動が核であって、ギリシア西北部に止っていたドリス人が大挙して、それと行を共にした、と推定せざるを得ない。彼らはミュケナイ文明の余燼ともいべき L. H. III<sub>C</sub> 期の末期にペロポネソスに侵入し、ここを支配するに至ったのである。

アポロドロス (II. 8. 2-4) の物語では、まずエウリュステウスの死後、ヘラクレイダイはペロポネソスに侵入し、すべての都市を征服したが、一年後、彼らが定めの時より早く帰還したことが神託によって明らかになったので、ペロポネソスから退去した、ことを述べ、次いで、ヒュロスの帰還に対する努力、アリストマコスの帰還失敗を叙し、最後にテメノスが帰還に成功する経緯を説いている。ここで注意すべきは最初の部分、ヘラクレイダイが侵入して、すべての都市を征服したが、一年間で退去した、という記事である。これは、明らかに L. H. III<sub>B</sub> 末期の移動民族によるミュケナイ文明の破壊の伝説的表現である。ことに短期間で退去したというのは、彼らがそこに定住せず、更に恐らく東方へ間もなく移動して行ったことに符合する。しかしながら、次のヒュロスとアリストマコスの失敗談に應ずるものは存在しない。けれども、ペロポネソスが L. H. III<sub>B</sub> 期を過ぎた後に、伝説のというような侵入者を阻止し得るだけの力を持ち得たであろうか。これは文学的要素の強い部分であるかもしれないが、また、この部分には多少の混乱が見られる。すなわち、アポロドロスはテメノスによって成しとげられたペロポネソス

帰還の際の戦争で、アイギミオスの子パムフュロスとデュマスが死んだ、というのが、この二人はヒュロスの義兄弟であり、ヒュロスから四代目のテメノス時代の戦争に参加することはあり得ない。しかも、ヒュロスの死から、テメノスによる「ヘラクレイダイの帰還」成功までは、ヘロドトスにもつくと一〇〇年とされているから、パムフュロスとデュマスはテメノスの時代にまだ生存していた可能性はないのである。Tomlinson は、総じてヘラクレイダイ伝説には様々な異説があり、都市によって異なった伝説が残存しており、それを組織立てて語ろうとするためにこじつけやつくり話が多くなつた、といっている。アポドロスの伝えるものは、おそらくヘラクレイダイに関する数多くの伝承を勘案したものであろうが、そのために多少の混乱が生じたのであろう。

とにかく、一二世紀後半のドリス人を主体とする侵入が、伝説上、「ヘラクレイダイの帰還」と称されているが、それはヘラクレスがペロポネソス地方で活躍した英雄であつたため、その子孫が父祖の地に帰つたのは当然だと見なすからである。アポドロスは、イリュリア系を主体とする民族のペロポネソスの侵略と通過 (L.H. IIIb 後半) 及び、ドリス人を主体とする侵入と定住 (L.H. IIIc 後半) を共にヘラクレイダイの行動としている。この伝承とヒュロスの侵入失敗の伝承とは本来、別個に成立したものでないか、と思われる。というのは、アポドロスは、最初のヘラクレイダイの侵入―実は L.H. IIIb の侵入民族―を述べるに際して、ヒュロスの名前を出していないのである。一たん退去して、再度、侵入しようというときに、はじめて、ヒュロスが登場する。また、ヒュロスがエケモスとの一騎打で敗れたという伝承は、最初のヘラクレイダイの侵入に際しては、イストモスで、ペロポネソス側から相当強力な抵抗があつたことの気憶ではなからうか。

これを要するに、ドリス人の侵入は L.H. IIIc であり、ミケナイ文明は、すでに L.H. IIIb にギリシアを通過した移動民族によって、ほぼ全面的に破壊されていた、と推定することができる。彼らはペロポネソスに定住するに当って、自らの侵入を「ヘラクレイダイの帰還」と称した。これは彼ら自身がその神話を持たず、また自身が侵入者であることを意識して、ヘラクレスとその子でドリス人と関係のあるヒュロスを通じて、彼らがペルセウスからの系譜をひくことを理由に、その侵入という行為と支配権の要求を正当化しようとしたものにはかならない。したがって、侵入者の核となつたイリュリア系の Hyllis 部族の名称こそ、彼らの系譜をヒュロスと結びつけ得たのであるが、ヒュロスはもともとイリュリア系民族、またはドリス人が所有していた英雄的存在ではなかつたかと推察される。彼らドリス人がペロポネソスに侵入したときには、破壊はあらかた完了しており、人口が激減していたこともあって、激しい抵抗も受けなかつたのではなからうか。要するにドリス人の侵入

は、極端に言えば、比較的平和裡に行なわれたのではないか、と推論することもできる。さらに、ツキユディデス (I. 12) は、ドリス人がヘラクレイダイと共にペロポネソスを占領したあとで、ギリシアは永続的な平和を回復し、間もなく、植民活動を開始した、といっている。このツキユディデスの記事は、ヘラクレイダイの帰還によって、むしろ混乱していたペロポネソスに秩序が回復したことを思わしめるが、それと同時に、民族移動の波もようやくおさまり、ギリシアにも、その後はあらたな民族の侵入がなかったことを示している。

## 五

以上の考察を要約すると、ギリシアの多くの王城を破壊し、ミュケナイ文明を崩壊させ、トロイア第七市Aを破壊したのはL.H. III期の後半にイリュリア方面からの移動して来た民族であること、彼らはギリシアには定住せず、更に東方に進んだこと、ドリス人はイリュリア方面からギリシアに侵入した最後の移動民族の主体となっていたこと、彼らはミュケナイ文明が、L.H. III期末に破壊されたあとでペロポネソスに姿をあらわしたと、したがって、ミュケナイ文明の破壊者ではなかったことなどが指摘できる。そして、ツキユディデスはトロイア落城後ヘラクレイダイの侵入までを八〇年としているが、これは、とりもなおさず、イリュリア方面からの民族の第一次侵入とその最後の侵入との期間をいっていることになり、<sup>83</sup>イリュリア系民族の侵入は八〇年乃至一〇〇年にわたって、何回かに分けて、中部ギリシアまたはペロポネソスを指して行なわれたことを示している。そしてその時期は一三世紀の中葉から一二世紀の末期に至る約一五〇年間の中に置かれると見ることができるのである。

### 〔註〕

- (1) M. I. Finley, EARLY GREECE: The Bronze and Archaic Ages, 1970, pp. 44—5.
- (2) しばしば「海の民」(Sea Peoples) と総称される。
- (3) Finley, op. cit., p. 59.
- (4) C. W. Blegen, Troy VI (CAH Vol. II, Part I, 1973, Chapter XV, pp. 683—685) & Troy VII (CAH Vol II, Part 2, 1975, Chapter XXI pp. 161—164).

- (5) Finley, op. cit., pp.62—63; F.H. Stubbings, The Recession of Mycenaean Civilization (CAH, Vol. II, Part2, 1975, Chapter XXVII pp. 338—358) p. 350.
- (6) Stubbings, op. cit., p. 352.
- (7) Finley, op. cit., pp. 63—66; Stubbings, op. cit., pp. 352—53.
- (8) Finley, op. cit., p. 60.
- (9) Stubbings, op. cit., p. 339.
- (10) Stubbings, op. cit., pp. 339—40.
- (11) Shubbings. op. cit., p. 340.
- (12) Finley, op. cit., pp. 58—59 岸本通夫「印欧語族の移動とミケーネ王国の抬頭」(『岩波講座世界歴史Ⅰ』一九六九年、一六一—一九六頁) 一八〇頁。
- (13) N. G. L. Hammond, The End of Mycenaean Civilization and the Dark age (CAH, Vol. II, Part2, 1975 Chapter XXXIVB. pp. 678—712) p. 690.
- (14) H. Bengtson, Griechische Geschichte von den Anfängen bis in die römische Kaiserzeit 2. Aufl., 1960, S. 52.
- (15) F. Schachermeyr, Seevölkerwanderung (Der Kleine Pauly, Bd. 5, 1975, Sp. 65—67).
- (16) R. A. Tomlinson, Argos and the Argolid, 1972, pp. 52—53.
- (17) 高津春繁『ギリシア文法』一九六〇年、七頁。
- (18) Bengtson, op. cit., SS. 51—52.
- (19) Bengtson, op. cit., SS. 49—50. なお彼はトロイア第七市<sup>a</sup>の滅亡は一二〇〇年頃のトラキア人の小アジア移動によるひきおこされた<sup>b</sup>と推定している。
- (20) 高津春繁『ギリシア・ローマ神話辞典』一九六〇年、二二二頁。
- (21) H. v. Geisau, Hyllos (Kleine Pauly, Bd. 2, 1967, Sp. 1266—1267).
- (22) Hammond, op. cit., p. 69; Finley, op. cit., p. 81.
- (23) Finley, op. cit., p. 63.
- (24) Finley, op. cit., p. 72.
- (25) Finley, op. cit., p. 60.
- (26) W. G. Forrest, A History of Sparta 950—192BC, 1968. p. 26
- (27) Hammond, op. cit., p. 711 は「シキエテステス<sup>c</sup>がI、IIでテッサリア人、ポイオネシア人、ドリス人の三種族をあげたのはギリシアに侵入して、しかも定住した種族だけを選んだのだという。その点も考慮すべきであろう。
- (28) Finley, op. cit., p. 66.
- (29) Finley, op. cit., pp. 63—66.
- (30) Hammond, op. cit., pp. 711—712.

ミケーネ文明の崩壊

- (31) 高津春繁『ギリシア民族と文化の成立』一九五〇年、二一〇頁、同『ギリシア文法』一九六〇年、三頁。
- (32) Tomlinson, op. cit., pp. 58—63.
- (33) 伝説上は、トロイアに遠征したアガメムノンの時代からヘラクレイダイ帰還の際のティサメノスの時代までであるが、トロイア滅亡はミュケナイ文明の破壊とほぼ同時であり、ヘラクレイダイの帰還はいうまでもなくドリス人の侵入である。